第83回日本内科学会講演会（1986年）

シンポジウム 血栓症の病態生理と治療*

司会 藤田学園保健衛生大学内科 水野 康

司会 金沢大学医学部第三内科 松田 保

司会者のことば

血液には、血管が破綻して出血を生じた時には、速やかに凝固して止血する性質がある。さまざまな原因により、止血の機序が障害されることによつて生ずる出血性素因に関しては古くから知られている。これとは逆に出血を生じていてもいないのに、血管内で血液が凝固して血管を閉塞し、いわゆる血栓症を生ずることがある。血液は、正常な血管内では凝固しないという、止血の機序とは矛盾した性質をもっているが、血栓症はこの性質が障害されて生じたものといふことができる。

本シンポジウムでは、血栓症の病態生理と治療について臨床的な立場から論ずるため公募を行ない、多数の応募演題中より10題が採択された。

まず、血栓形成に関する血液凝固性亢進状態の演ずる役割であるが、凝固活性化のひき金としての組織トロンボプラスチン、また、凝固過程の進行を阻止する要因としての血中の凝固阻止因子の役割が大きいことは、血液凝固学的には確立しつつあると思われる。最初の3演題はこの点につい

て触れるものである。

次の5題は主として動脈硬化性疾患または動脈硬化症の危険因子となり得る疾患における血栓症発現の要因、診断法について論じたものであり、レオロジーを含み、具体的な内容をもっている。

また、血栓症の予防と治療に関しては、最近の数多くの抗血小板薬、さまざまな血栓溶解薬の登場、PTCRなど血栓溶解剤の投与方法の進歩と、その効果判定の確実化など、大きな進歩がみられつつある。最後の2題では、虚血性心疾患と虚血性脳疾患について、その最も新しい側面が論じられた。

現在、凝固亢進状態の本態とその診断、血栓症の診断技術、血栓症の予防、治療に関しては、急速な進歩が見られつつある。今回のシンポジウムはこの急速な流れの中で、現時点として、最も新しい話題にふれたものであるが、このテーマをとり上げた意義は決して小さくないものと信ずる。

*本シンポジウムは1986年4月3日、東京都千代田区紀尾井町4-1ホテルニューオオタニにて行なわれた
(本シンポジウムは公募した)。

Symposium on pathophysiology and treatment of thrombosis.

Moderator: Yasushi MIZUNO Prof., Department of Internal Medicine, School of Medicine,
Fujita-Gakuen Health University, Toyoake

Moderator: Tamotsu MATSUDA Prof., The Third Department of Internal Medicine,
School of Medicine Kanazawa University, Kanazawa